

大塚勇三の仕事

—— 子どものための読書ガイドとしての大塚勇三 ——

青木真理

1. 大塚勇三（1921～2018）との出会い

大塚勇三は北欧の児童文学を中心とする翻訳家で、1921年に生まれ、2018年に没した。筆者は、1968年、6歳の時、アルフ・プリョイセンの『小さなスプーンおばさん』（学習研究社）で、翻訳者としての大塚勇三と出会った。同年、アストリッド・リンドグレーンの『やかまし村の子どもたち』（岩波書店）で二度目に大塚勇三に出会う。以来、背表紙に原作者と並んで記された大塚勇三の名前を何度も見ることになる。以下にその表題を示す。

アルフ・プリョイセン 『スプーンおばさんのぼうけん』『スプーンおばさんのゆかいな旅』（学習研究社）

アストリッド・リンドグレーン 『やかまし村の春夏秋冬』『やかまし村はいつもにぎやか』『長くつ下のピッピ』『ピッピ船にのる』『ピッピ南の島へ』（岩波書店）

オトフリート・プロイスラー 『小さい魔女』『小さい水の精』『小さいおばけ』（学習研究社）

『スーホと白い馬』

① 1969年光村図書の小学校二年生の国語教科書、大塚勇三再話

② 福音館書店、赤羽末吉絵、大塚勇三再話

筆者は、背表紙に大塚勇三の名前のある本は面白く感じて、大塚勇三を本選びのガイドとして信頼するようになった。

スプーンおばさんのシリーズやプロイスラーの「小さい〇〇」のシリーズが入っていた学習研究社の「世界の新しい童話シリーズ」の編集同人の

一人でもあったので、このシリーズの編纂にかかわっていたようである。

本論は、大塚勇三の生涯と仕事を振り返り、筆者の体験を通じて子どもの読者にとっての大塚勇三の役割を論じる。



図1 大塚勇三（2014年9月、93歳当時。妻の大塚道より提供）

2. 大塚勇三の生涯と仕事

まず、大塚勇三の生涯と仕事について、『こどもとしょかん』165号（2020年春号）¹⁾の「追悼大塚勇三」特集を参考に、述べたい。

1) 来歴

大塚勇三は、1921年、満州の安東で生まれた。父親が教師のため、満州内を転々とする。昭和の初めに東京に戻り、日暮りに住んだ。五人きょうだいの三番目で、兄二人、妹と弟がいた。木登りが得意だった。一方本も好きで、日本児童文庫、小学生全集、南総里見八犬伝などを読んでいた。

武蔵高等学校から東京帝国大学法学部に進学した。学生時代、兄の影響で映画、歌舞伎、文楽などに親しみ、特に落語が好きであった。

1942年に大学を卒業し、応招し、水戸の工兵隊に配属された。幹部候補生として工兵学校にいる間に発熱し、陸軍国府台病院送となる。その病院に衛生兵として瀬田貞二²⁾ がいて俳句を教えていた。のちに児童文学作家、児童文学翻訳家となる人物である。その瀬田貞二に「中村草田男を知らんようじゃ話にならん」と言われ、勇三は草田男の句集を借りて写した。兵役解除となり、東京に戻る。

終戦後の1947年、キャスリーン台風で関東地方が水害に遭う。被災地ボランティアにいき、のちの妻となる道と出会った。道は、当時東京女子医学専門学校を卒業してインターンを務めており、勇三と同じくボランティアにきていた。1948年に結婚して3か月後、勇三は結核を発症し、療養生活に入る。

結核から回復後、平凡社に勤務し、『世界の子ども』シリーズの編纂にかかわる。社内に瀬田貞二がいて『児童百科事典』の編集をしていたが、二人とも社会的でないので2年間互いに気づかずに過ごしたという。それぞれのシリーズの仕事が終わり、瀬田貞二が「北極星文庫」を立ち上げた際に、大塚勇三も参加して顔合わせのとき、兵隊時代の出会いによく気づいた。

瀬田経由で翻訳の仕事が勇三に回ってくるようになる。やがて1960年代初期、勇三は平凡社を退職して翻訳に専念するようになる。瀬田より、トロイ遺跡を発見したシュリーマンについて書いたヴィーゼの『夢を掘りあてた人』の翻訳をすすめられ、岩波書店を紹介された。そして岩波書店

から同書を出版する(1969年)。

同じころ、神宮輝夫³⁾とも知り合う。1932年生まれの神宮は早稲田大学在学中から児童文学の翻訳を行っていた。勇三と神宮はともに、学習研究社「世界の新しい童話シリーズ」の編集同人となり、紹介すべき児童文学の選定と翻訳に携わることになる。勇三がこのシリーズで翻訳・出版したのは、ブリョイセンの『スプーンおばさん』シリーズ、プロイスラーの「小さい」シリーズ、神宮が担当したのはジューダ『ほらふきマックス』、リーブス『十一わの白いハト』などである。

2) 翻訳についての考え方

勇三は語学に堪能で、英語、ドイツ語、中国語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、オランダ語などに通じていた。

リンドグレーンの『長くつ下のピッピ』の翻訳にまつわるエピソードはこのようなものである。当時岩波書店の編集者でその後児童文学作家となったいぬいとみこ⁴⁾が勇三に翻訳を依頼した。その際、いぬいは、英語訳版とドイツ語訳版からかまわないと伝えたが、勇三は「三か月ください。そうしたらスウェーデン語から訳します」と言ったらスウェーデン語を学び、原典から翻訳を行った。

勇三は、語学に堪能なことについて「言葉に恐れをもたないのは満州生まれだから」「言葉というのは、道具、必要があれば、手間さえかければできるのです。イギリスの子どもは三歳になれば英語をしゃべります。それも食べたり飲んだりするために、しゃべらないと生きていけないから。ぼくもおもしろそう読んでみたいから、外国の本を読んだだけ」と語った。

筆者は高校生のとき、大塚勇三に手紙を出したことがある。進路に迷っていて、翻訳家になりたい気持ちがある、と書いて、学習研究社か岩波書店かどちらかの編集部気付で出したところ、勇三は返事をくれた⁵⁾。その中には「翻訳は、なによりその国の文化を好きになることが大事であって技術はその次」という内容が書かれていた。

とはいえ、技術を軽視していたわけではない。勇三の翻訳についての考え方は以下のようなものである。

「翻訳というのは、外国語をそっくり日本語に置き換えることだと思われるけど、それは本当は不可能なのですね。相似形のものを作るほかはない」

「『こういう感情のときに、日本人はどういう言葉をしゃべるかな』と思ったとき、昔のみごとな言葉づかいが、いろいろと出てくる。そういう変化形をもっていないと、いくら原本を読んでも日本語に持ってこられない」

「原文は英語だなんて気にしないで、ハックルベリー・フィンには本当にこういう風にしゃべっているんだ、と思ってもらえたらいい」

勇三は、言葉遣いや語彙だけでなく、流れや間も含めて耳から入る音としてのイメージを強く意識していたようである。翻訳の原稿は、いつも妻の道に声に出して読んでもらって校正をしたという。『スーホの白い馬』の時は、道が途中で泣けてしまい詰まったという。

3) 落語の影響

福音館書店の元編集者、古川信夫⁶⁾は、勇三が落語の影響を強く受けていると語っている。古川自身が落語好きだったので、勇三と落語の話をした。勇三は特に桂文楽が好きだった。勇三は「ぼくは桂文楽が大好きで、寄席に行つていつも聞いていました。毎晩同じように演るんですけど、常に感動を新しくできる。それが名人ですよ」と語っていた。

古川は、勇三の翻訳の中に桂文楽の影響を見ている。文楽は「フレーズづくりの天才」で、それが大塚勇三の造語に影響を与えているというのである。たとえば、『長くつ下のピッピ』の住まいの「ごたごた荘」、ピッピが学校に行つて、算数の授業を見学し、「かけ算の九九」を聞き間違えて「竹さんのくつ」と呼ぶエピソードなどにおける造語である。

また、『トム・ソーヤーの冒険』（マーク・トウェ

イン 福音館書店)のトムとハックルベリー・フィンの出会いのシーンの「よう、ハックルベリー」「よう、そっちこそってなもんだ」というやりとりは、まさに落語のやりとりそのものである、と古川は指摘する。

桂文楽の『景清』⁷⁾に影響を受けていて、『スーホの白い馬』という悲しくて心にしみる話を選んだのは、『景清』の影響ではないか、と古川はいう。また、リンドグリーン作品について勇三が「つらいさだめをもった小さい主人公たちをあたたかく見まもり、そのよこび、悲しみ、または勇氣などをくっきりとえがいています」(『はるかな国の兄弟』訳者のこぼれ)と述べていることは、『スーホの白い馬』にもあてはまる、と古川は語っている。

勇三がリソースとして持っていた「昔のみごとな言葉づかい」の「変化形」のひとつが落語の口調ということであったのだろう。主人公が「本当にこういう風にしゃべっているんだ」と読者に感じさせるために、たとえば、落語の登場人物の造形を念頭に置いていたのではなかろうか。

4) 昔話

『スーホの白い馬』を執筆することになった経緯は以下の通りである。福音館書店の月刊誌「母の友」は1960年代初頭より世界の昔話を紹介する連載を始めた。絵本作家の赤羽末吉がモンゴルを描きたいと言ったので、当時福音館書店「こどもものとも」の編集長だった松居直⁸⁾は勇三にモンゴルのお話を探すことを依頼した。勇三は満州生まれで中国に関心があり、中国語の民話の本を買い集めて読んでいたからである。その結果、大塚勇三再話、赤羽末吉絵の『スーホの白い馬』が誕生した。

勇三は中国だけでなく様々な地域の昔話に関心があつて読んでいたので、松居は続けて、ほかの絵本作家が書きたい国の民話について、勇三にお話を選定、再話することを依頼した。その結果、モンゴルからは『スーホの白い馬』(赤羽末吉・絵)、ポリネシアから『おおきなかぬー』(土方久坊・絵)、

ネパールから『ピンクマンチャ』（秋野亥左牟・絵）という昔話が絵本となって出版されることになった。勇三は晩年まで世界の昔話を収集して研究していたようである。

5) リンドグレーン

勇三が亡くなる直前に読んでいたのが『はるかな国の兄弟』だという⁹⁾。『はるかな国の兄弟』は、リンドグレーンが、死の不安を感じていた孫のために書いた、“死後の世界”の物語である。勇三はこの本を読みながら自身の生と死を思っていたのであろうか。

勇三が訳した『ピッピ南の島へ』の巻末に、北欧児童文学の翻訳家である小野寺百合子の「アストリッド・リンドグレーン夫人を訪ねて」¹⁰⁾と題する訪問記が掲載されている。その中で小野寺は、大塚勇三がピッピを原書、ドイツ語版、英語版をつきあわせて訳していることを伝えるとリンドグレーンは満足していたと書いている。

『こどもとしょかん』165号には、2019年10月28日に行われた妻の道のインタビューも掲載されており、そこでもリンドグレーンと勇三の逸話が語られている。道は、勇三が特に好きなのはリンドグレーンとグリム、と語る。リンドグレーンの最後の長編である『山賊のむすめローニャ』はスウェーデンでも発刊されないうちにリンドグレーンが「これをぜひ大塚勇三に訳してほしい、自分としてはとても好きな作品だから」と岩波署限に原稿を送ってきたのだという。道は「(岩波書店の編集者だった) いぬいとみこさんが鬼の首でもとったように喜んでいました」と語っている。

また、このような逸話も紹介している。「『リンドグレーンさんに会いにスウェーデンに行きたい?』と聞いたら勇三は『会うのは怖い』。女の人が恐かったのです。いぬいさんでも、最初のうちは恐くて顔を見なかったんです。勇三が『こんど結婚する』といったときに友達が、『本当か、本当に女の人と結婚するのか』といったって。結婚は勇三のほうから申しこんだのですが。私のことは女とっていなかったんじゃないかしら」。

6) 道のインタビューより

上述の道のインタビューを続けて紹介する。

勇三は、「お前と結婚したから、おれは助かった」と言っていたという。東京女子医学専門学校で結核の勉強していたのが役立ったのだと、道は述懐している。

1948年に結婚してすぐに勇三が結核になり療養生活に入ったため、生計は板橋の病院務めをする道が支えたが、やがて道自身が過労で結核にかかって退職することになった。病から回復後、道は川崎のセツルメントに勤務し、そこで児童文学作家かこさとし¹¹⁾と出会っている。

道によれば勇三は「仕事以外は何もできない」人で、「ガスの火がボツというのが怖くてつけられな」かった。

また道にだけ軍隊暮らしで覚えた「悪い言葉」を使った。「私にだけは本当にわがままでした」「どうして私にだけこんなにわがままなの?ときいてみたことがあるのです。そうしたらまじめに考えていまして『たぶん、信頼しているからだろな』って。何をいっても大丈夫だと思っていたのですね」

3. 大塚勇三の翻訳、文体

この項では、大塚勇三の翻訳、文体の特徴について、プリヨイセンの『スプーンおばさん』シリーズとリンドグレーンの『やかまし村』シリーズを題材にとりあげて、筆者の考えを述べる。

1) アルフ・プリヨイセン『スプーンおばさん』シリーズ (学習研究社 1966, 1968, 1970)

ノルウェーのアルフ・プリヨイセンの『小さなスプーンおばさん』の原題は Kjerringa som ble så lita som ei teskje で、「ティースプーンくらいに小さくなるおばさん」の意味であり、2作目 Teskjekjerringa på nye eventyr は、「ティースプーンおばさんのあたらしい冒険」である。これを「スプーンおばさん」と訳出したところに勇三のセンスが光る。ティースプーン、と原題通りに名付けたとしたら、長すぎて呼びづらく、今日ほど親し

みをもって日本の読者に受け止められることはなかったかもしれない。ちなみに、英語版は Mrs. Pepper Pot¹²⁾ (こしょうびんの意) としており、スプーンを意味する単語は採用していない。おそらく、小さいテーブル用品の中から選び、Pepper Pot というオノマトペ的な響きを重視したのではないと思われる。

おばさんの夫は、原作では *mannen hennes* と記述され、直訳すれば、彼女の夫、である。これを勇三は、夫、主人、だんな、だんなさん、などとは訳さず、「ごていしゅ」とした。この語の選定に、前述した古川の言う「落語の影響」がうかがえる。落語では、女性の語り手が夫のことを「ていしゅ」と呼ぶことが多い。

第1作『小さなスプーンおばさん』の最初のお話「おばさん、ちいさくなる」から、その翻訳の文体について考えてみよう。なんの前触れもなくティースプーンみたいに小さくなってしまった“おばさん”は、まったく動じず、たまった家事を片付けていく。洗濯物は乾いたせんたくおけに入れてあった。それを洗うという課題に直面したおばさんは次のように独り言ちる。

「あたしは、生まれてからなん十年にもなるけどさ、こんなにからからなのは見たことないよ。もしか、いますぐ雨がふらなけりゃ、はたけはだめだし、病気がはやるよ。」

この言葉に怒りくるった雨が「おばさんをおぼれさせてくれよう」と激しく降り、せんたくおけの中に入った洗濯物は狙い通りに洗われることになるのであるが、このおばさんの語り口調にも、江戸前の落語の影響が見てとれる。

同作の「おばさん、コケモモの実をとりに行く」というお話は、なぜか不機嫌で憂鬱そうで、にもかかわらずその理由を明かさないう“ごていしゅ”を不審がるおばさんが、パンケーキを食べたいのかと慮って、つくって出してやる。一瞬明るくなったごていしゅの表情におばさんは安堵するが、すぐにまたその表情が陰ってしまう。業を煮やしたおばさんは、いったいどうして不機嫌なのか、理由を言うようにと詰め寄る。ごていしゅは、コケ

モモのジャムのついたパンケーキを長い間食べていない、と、その憂鬱の理由を告白するのである。そんなごていしゅに腹を立てつつもおばさんは、森にコケモモをとりに出かける。ちなみに、コケモモの原語は *blåbær* で、ブルーベリーのことである。翻訳が出版された1960年代はブルーベリーは今のようには知られてはいなかった。

森に出かけたおばさんの独白は以下のようなものである。

「うちのくくらいばかな人は、見たことないわ。あーあー、あの人と一緒になるなんて、あたしは、なんてばかだったんだろ。この世の中で、あたしよりばかな人間はたったひとり、それが、あたしのごていしゅときてるんだわ。」

考えや感情をつまびらかにしない夫、その気持ちをあれやこれやと考えながら世話を焼いてしまう妻、まるで志ん生の「厩火事」¹³⁾の髪結いの妻と怠け者で焼き物道楽の夫の関係のようである。勇三の翻訳文体が落語的であるから、なお一層そのように感じられる。

コケモモを摘んで集め始めたおばさんは、例によって突然ティースプーンのように小さくなった。ビヨルン・ベリイの挿絵を見れば、コケモモを摘んだコーヒーカップはおばさんよりも大きくて、とうていおばさんには、このカップを道においたバケツまで運ぶことも、バケツを家まで持ち帰ることはできそうにない。しかし例によって全く動じないおばさんは、森で出会ったキツネ、オオカミをうまく利用して、カップのコケモモをバケツまで運ぶことに成功する。最後にやってきたのはクマで、コケモモを食べたいと言う。せっかく機智を利かして集めたコケモモをとられてしまったのは元も子もない。そこでおばさんは言う。「ですが、王さま。あなたは、ほかのれんちゅうとはちがいますから、あわれな小さい女から、これをとりあげようとは、なさいませんよね?」「では、もし王さまが、道までこのバケツをはこんでくださるなら、そのあいだじゅう、あたしは、陛下の耳のうしろをかいてあげますわ。」

元の大きさに戻って、コケモモを家に持ち帰っ

たおばさんは、最後に言う。「からだなんかちっちゃくたって、なんでも、かんたんにかたづけられるわ。であつたれんちゅうのあつかいかたを、よくしっていさえすりゃいいんだよ。」「ずるいのはだましてやること。おくびょうなのは、おどしてやること。そして、つよいのは、耳のうしろをかいてやることさ。でも、きげんのわるい男には、あつかいかたは、たったひとつ。それは、パンケーキにコケモモのジャムをつけてやることだね。」

これはプジョイセンの人間観と、落語で培われた勇三の文体が一体化したようなセリフである。「でも、きげんのわるい男には」のくだりは、落語でいうサゲそのものである。

2) アストリッド・リンドグレン『やかまし村』シリーズ (岩波書店 1965)

スウェーデンの作家アストリッド・リンドグレンの『やかまし村の子どもたち』『やかまし村の春夏秋冬』『やかまし村はいつもにぎやか』は、スウェーデンの田舎の小さな村の子どもたちの日常を描き、作家の子ども時代の遊びと生活が反映された作品である。

やかまし村には家が三軒しかない。子どもの数は六名で男の子が三人、女の子が三人と同数である。北屋敷にはブリッタとアンナ姉妹、中屋敷には、主人公の少女リーサと兄二人ラッセとボッセ、南屋敷には少年オッレが住んでいる。おとなたちの買い物、子どもたちの学校は、かなり離れた隣町の大村までいかなければならない。やかまし村と大村の中間地点に靴屋のスネルさんが住んでいる。子どもたちは学校に徒歩で通うので、いつもスネルさんの家の前を通る。「スネル」は、「親切な」という意味なのに、当人は人嫌いである。「子どもなんて、ろくでなしだ。まい日、なぐってやらなきゃいけないんだ」と口癖のように言う。

スネルさんの飼い犬であったスヴィップは、今ではやかまし村の住人の子どもたちのひとり、オッレが飼っている。靴屋の前につながれていつも吠えてばかりだったスヴィップのことをオッレはなぜか好きで、「おまえはいい犬だね」と話し

かけ、肉つきの骨をもって行って与えたりしていた。あるときスネルさんは足を怪我し、ふだんからあまり丁寧に面倒を見ていたとはいえないスヴィップを全く放置する事態となった。オッレは勇をふるってスネルさんにスヴィップの世話をさせてほしい、と申し出る。スネルさんは言う。

「ほう、そいつは拝見したいもんだな！ おまえがそばによつたとたん、あいつは、のどぶえにとびつくぜ。」

スネルさんのこのセリフの文体はいかにも小悪党的で、このように不機嫌で乱暴で人嫌いな偏屈であるが、子どもたちが靴屋の前にある、雪解け水で洪水状態になった牧草地で難破船ごっこをして「助けてくれ」と叫んだのを真に受けて子どもたちを助けにってしまうお人好しな面もある。あまりに内気すぎてやさしさや親切さを素直に表現することができない人物なのかもしれない。

勇三が「原文は英語だなんて気にしないで、ハックルベリー・フィンは本当にこういう風にしゃべっているんだ、と思ってもらえたらいい」と語った通り、小悪党を装っているが根は親切でないわけではないこの人物がそこにいてしゃべっているように思えてくる。

勇三の文体には、オノマトペの面白さが感じられる箇所も多い。

やかまし村の唯一の高齢者、北屋敷のおじいさんは、ブリッタ・アンナ姉妹のおじいさんであるが、やかまし村の住人みんなにとってのおじいさんと認識されており、子どもたちは視力の弱ったおじいさんの部屋に出かけて過ごすのが好きである。子どもたちはおじいさんの部屋で、お菓子をもらったり、新聞を読んであげたりする。しかし語り手のリーサは言う。「おじいさんは、ブリッタとアンナとわたしとに読んでもらうほうが好きです。というのも、男の子の読みかたときたら、いいかげんで、広告やなんかを、ごっそりとはして読むからです。(斜字体は筆者、以下同じ)」

女の子たちが長いひもにタバコの空き箱をくりつけて屋根裏部屋同士で手紙のやりとりを始めたとエピソードでは、女の子たちはそれぞれとらわ

れのお姫様という設定にして手紙を書く。その手紙を発見したラッセが書いた手紙は、「リーサひめは、はなをかまなきやならないので、でかけました。でも、ここには、王子さまがどっさりいますよ。」

ラッセについては「それに、ラッセときたら、週刊誌から、ありとあらゆる、きみょうなおじさんの絵を切りぬいて、地理の教科書にある絵にはりこむのです。『こうやると、ぐっと変化がでるんだ。』」という描写もある。

ごっそり、どっさり、ぐっとというオノマトベには、ラッセの悪戯でアイデアが豊富な性格があらわれているように感じられる。

また、大村の小学校に着いてみたら、学校が休みだったというエピソードがある。先生の急病で休校になったのだが、やかまし村には電話が通じていなかったの、連絡のしようがなかったのである。学校の階上に住む先生の部屋を子どもたちが訪ねると「くちゃくちゃになったベットにねていて、とてもオートミールをほしがっていました」。弱って支援を受ける側にまわった先生に対する子どもたちのいつくしみ、いたわりの気持ちが、くちゃくちゃというオノマトベには感じられる。

勇三の文体は、あまったるい文体で読者を子ども扱いすることをしないのも特徴的と言えるだろう。

4. 子どもの本のガイドとしての大塚勇三

勇三が亡くなったときの追悼記事として、児童文学作家の斎藤惇夫¹⁴⁾は「大塚さんは、まるで子どもたちから隠れるように、彼らのための物語を探し、選び、言葉を推敲した」と書いている(2018年10月1日毎日新聞)。

勇三は表舞台に出ることを好まず、斎藤がいうように「隠れるように」しながら、子どものための物語を探し、選び、翻訳をした。筆者は、勇三が亡くなる2年前に、講演の依頼を行った経験を持つ。しかし、2016年1月に妻の大塚道からの丁寧な断りの返事が来た。そこには、表に出て話

すことを昔から好まずお断わりしている旨が書かれていた。

前述したように、大塚勇三は、子ども時代の筆者にとっての読書ガイドであった。筆者の読書歴の最初の本格的な本との出会いはブライヨイセンの『スプーンおばさん』であり、次いでリンドグレーンの『やかまし村』であった。これらの本に出会った大阪市の大型書店の児童書売り場が特別な場所に思えた気持ちを今でもはっきりと覚えている。そこには筆者の育った三重県の田舎町の古ぼけた書店とは全く違った雰囲気があった。そして見つけ出した『スプーンおばさん』と『やかまし村』がどちらも北欧の作家であること、そして訳者が同じ大塚勇三であるということは、大きな驚きであり、それらにますます魅了されることになった。そして本論の冒頭に書いたように、背表紙の「大塚勇三訳」の文字は、面白い本に出会えるガイドとなって、それを手掛かりに本を選んで読んでいったのである。

学習研究社の「新しい世界の童話シリーズ」は1960年代の中ごろ発刊された。子どもの本のシリーズとしては、それに先駆けて岩波少年文庫があった。岩波少年文庫創刊70年の特設サイト¹⁵⁾には、以下のような「ごあいさつ」が掲載されている。

岩波少年文庫は、終戦後まもない1950年のクリスマスに創刊されました。最初の書目は『宝島』『あしながおじさん』『クリスマス・キャロル』『小さい牛追い』『ふたりのロッチェ』の5冊。創刊にたずさわった石井桃子さんは、海外で長く読みつがれている作品から、自分にとって「喜びの訪れ」と感じられる本を選びぬき、編集し、少年文庫の礎を築きました。

70年のあいだ、古今東西の名作を美しい日本語で届けるという基本姿勢はそのままだに、リニューアルや新訳への切り替えなども経ながら刊行を続けてきた少年文庫。幸いにして3世代にわたる多くの読者に愛され、収録作品数は460を超えました。

岩波少年文庫は終戦後まもない時期に、海外の「喜びの訪れ」と感じられる本を選び、紹介した文庫であり、石井桃子がその編集者の一人であった。学習研究社の「新しい世界の童話シリーズ」は、先発の「岩波少年文庫」を念頭において発刊されたであろうことは想像に難くない。「新しい」と銘打ったのは「岩波少年文庫」への敬意と差別化の意思を反映しているのではないか。そして、岩波書店での翻訳出版と並行して、「新しい世界の童話シリーズ」の編集同人に名を連ねた大塚勇三は、先輩の石井桃子の仕事を追うように、「新しい」、つまりまだ日本で知られていない童話を探して選び、訳出するという仕事に取り組んだ。ちなみに石井桃子はリンドグレーンと同じ1907年の生まれで、勇三の20年くらい年長であり、勇三逝去の10年前の2008年に101歳で亡くなっている。

学習研究社がかつて出版していた「新しい世界の童話シリーズ」は、今はもう新しい本を出してはいない。当時のシリーズで廃刊にならずにいるのは、プジョイセンの3冊とプロイスラーの『小さい魔女』だけのようである。これらはいずれも大塚勇三訳である。学習研究社のウェブサイトを開いたところ、新しい世界の童話シリーズに言及する頁はなかった。かつて、岩波少年文庫を追いかけ、良質の世界の児童文学を日本の子どもたちに紹介しようとする気概はすでに失われているようである。岩波少年文庫が70年を超えて出版を続けていることと比較すると寂しい限りである。

しかし、新しい世界の童話シリーズの成果は決して小さくはない。そしてそのシリーズで大塚勇三がなした仕事は、「子どもたちから隠れるように」しながら、子どものための読書ガイドであった。このシリーズで大塚勇三成した仕事について、今後調査していきたいと考えている。

註

- 1) 東京子ども図書館『こどもとしょかん』165号 2020年春号
- 2) 瀬田貞二(1916-1979) 東京帝国大学国文科卒業。戦後、夜間中学の教師をしながら児童文学の評論を行う。1949年、平凡社に入社して『児童百科事典』の編集を行う。その後退社して、児童文学の翻訳、評論、創作を精力的に行った。翻訳にはルイス『ナルニア国ものがたり』(岩波書店)、トールキン『指輪物語』(評論社)などがある。中村草田男を主宰として創刊された俳誌「萬緑」の初代編集長も務めていた。
- 3) 神宮輝夫 1932年生まれ。児童文学翻訳、評論を行う。主な翻訳作品にランサム『ツバメ号とアマゾン号』シリーズ、センダック『かいじゅうたちのいるところ』など。
- 4) いぬいとみこ(1024-2002) 児童文学作家、編集者。代表作に『ながいながいペンギンの話』。
- 5) 大塚道の筆者への私信によると、道さんの記憶する限りでは、勇三が読者の手紙に返事を出したのは生涯に二度だけ、とのことである。
- 6) 前掲書「講演会より 大塚勇三さんのこと 川崎康男・古川信夫」における発言。
- 7) 景清。視力を失った木彫師が上野の清水の観音様に願掛けをし、紆余曲折を経て、目が見えるようになる話。
- 8) 松居直(まついただし) 1926年生まれ。同志社大学法学部卒業後、福音館書店に入社し編集の仕事始める。編集長として1953年に月刊「母の友」、1956年「こどものとも」を創刊し、多数の絵本作家の才能を発掘した。児童文学評論、創作も多数。
- 9) 1)に同じ。
- 10) 小野寺百合子「アストリッド・リンドグレーン夫人を訪ねて」アストリッド・リンドグレーン著、大塚勇三訳『ピッピ南の島へ』(1965 岩波書店)に所収。
- 11) かこさとし(1928-2018) 絵本作家。東京帝国大学工学部卒業後、化学工場で研究をしながら、川崎でセトルメント活動に参加。最初の絵本は1969年に出版。代表作に『からすのパンやさん』シリーズ。
- 12) Little Old Mr. s Pepperpot Young Puffin Books 1967.
- 13) 厩火事。髪結いをしている主人公の亭主は怠け者で昼間から遊び酒ばかり呑んでいて、口喧嘩が絶えない。亭主の気持ちかわからないと仲人に相談を持ち掛けたところ、中国のとのさまが秘蔵の白馬を火災で失ったが、家臣を咎めずかえって家臣の体を心配したという故事と、焼き物を大事にするあまり妻が実家に帰ってしまった武家の話をする。そして目の前で夫が大事にしている焼き物を割り、どのように反応するかを見たらよいと助言。早速実施した結果、夫は彼女の方を心配した。喜んだ彼女が「そんなにあたしのことが大事かい?」と質問すると、亭主は「当たり前だ、お前が指でも怪我したら明日から遊んで

酒が呑めねえ」

- 14) 斎藤淳夫 1940年生まれ。立教大学法学部卒業後、福音館書店に入社し、児童書の編集に携わる一方で創作を行う。代表作は『冒険者たち ガンバと15ひきの仲間』。
- 15) 岩波少年文庫について ごあいさつ 岩波少年文庫

創刊70年特設サイト 岩波少年文庫について—少年文庫創刊70年特設サイト—岩波書店 (iwanami.co.jp) (2021年4月15日最終確認)

(2021年4月15日受理)

An Essay on Ohtsuka Yuzo's Life and Works Focusing on His Contribution as an Excellent Book Guide for Children

AOKI Mari

Ohtsuka Yuzo is a translator of children book especially from Scandinavian countries. In this paper I described his life and works, and made critical remarks on his literary style influenced by his favorite Rakugo way of telling a story. And I emphasized his contribution to young readers as an excellent book guide.